

「忠臣蔵」の精神史

― 有利・不利という視点から ―

常 吉 幸 子

【要旨】

吉田松陰の『東北遊日記』の旅は、〈亡命〉の旅であつた。国元（萩藩）からの正式な旅行許可を待ちきれず、出奔するような形になつた理由は、不可解である。そのように急いで出立した理由として、十二月十四日の赤穂義士の討ち入りにあわせたかつた、といつた一見軽薄な理由もみえる。また、脱藩して兄の敵を狙う友人を「うらやましがつた」節もみえる。順風満帆にもみえた吉田松陰の人生を暗転させた、この拳の意味は何だろうか。その鍵は、その拳の〈本歌〉となつた、所謂赤穂義士討ち入り事件の本質にも関わるものである。この元禄末のあまりにも偶像化された事件は、その実、極めて周到に考え抜かれた、赤穂遺臣たちの〈センスメイキング〉の成果として、非常に〈強い〉事象であつた、と筆者は考えている。多くの学者達がときに厳しく批判するが、それはときとして「織り込み済み」のものに過ぎず、論理的にさえ否定し得なかつた、という意味において〈強い〉のだ。それは、その〈本歌取り〉である、松陰の〈亡命〉の意味にも関わってくる。その〈本歌〉があたえた強さは、その一見「愚拳」にも見えるものに、特別な意味を与えた。彼はこの拳によって自ら破滅したが、その一方でその「理想」に「教育」という道を与えたのである。

吉田松陰は、よく知られた「幕末の志士」のひとりであり、その門下にすぐれた俊才を輩出した、伝説的な教育者である。十九世紀幕末の萩藩に、貧しかったが教育に熱心な家庭に育ち、叔父吉田大助賢良の養子となり、六歳にして兵学師範として毛利氏に仕える家を嗣ぐ運命をになう。彼は常に書を読み、ノートを取り、学び、考え続けた人である。それが何を意味するか、私たちの多くは身をもってわかっているはずである。とにかく彼は、とびきり優秀な、学習者であり、考える人として、まづあった。

一方で、彼は生涯において二度にわたり、その「意図」はさておき、結果からいえばほとんど悲劇的とさえいえる運命の転換をもたらす大きな失敗を自ら招いている。その結果、多難でドラマチックな生涯を生きて、ついには安政六1859年一〇月二七日、江戸伝馬町の獄舎において処刑されることになる。未曾有の国難の時期だったといえるかもしれない。情熱とも愛国ともいえるかもしれない。しかし、そう解そうとしてもなお、不可解なのである。その不可解な「躓き」の重大な要因が「赤穂の義士事を遂げし日」であったことの意味は何だろう。宮部鼎蔵・安藝五蔵（＝江幡五郎）とこの日に出発しようと約した。¹ いかにも「軽薄」にも見える、この判断は、いったいどのような意味で「了解」しうるものなのだろうか。少し引用してみよう。

初め、本月十五日は赤穂の義士事を遂げし日なるを以て、余二子と東行發を約するに、是の日を以てす。前数日、過書の事起こる。² 藩人來原良蔵曰く、「憂ふることなかれ、吾れこれを大夫に論ぜん、子必ず行くことを以て志を定めよ」と。乃ち二子に謂ひて曰く、「決して、行くべからざるの理なし」と。余、良蔵の果断に服し、心竊かに自ら誓つて曰く、「官若し允さずんば吾れ必ず亡命せん。ここに於て遲疑せば、人必ず長州人は優柔不断なりと曰はん。是れ國家を辱むるなり。亡命は國家に負くが如しと雖も、而も其の罪は一身に止まる。之れを國家を辱むる

に比すれば得失何如ぞや」と。

脱藩して一言で「国の榮ほまれ」をなす「果斷」の志士を目指していた、とでもいうのだろうか。このあたりの理屈は「さむらい」の時代もはや遠くなつてしまつた現代人である私には、極めてわかりにくい。松陰自身この拳を「用猛第一回」と称しているという。いうまでもなく「第二回」は下田における米國渡航の失敗。おそらく自らの推敲を経た最終稿でもある、『全集』所収本では、右に見えるように、長州人としての名譽のため、つまり、「國辱」を思い、「かくすればかくなるもの」と後日の手痛い処分も覚悟の上であつたように記されている。

一見、負け惜しみの「強がり」で、後付けで合理化しているようだが、たとえそうだとしても、これは、あらゆるところに類型を見出す、〈忠臣蔵〉型の精神の反映を表すリアクションである。いや、ちよつと論を先回りしすぎたかどうか。もうすこし腰を落ち着けて、この問題を考えていきたい。

さて、近年赤穂義士討ち入り事件等と称される、その出来事は、間違いなくモニメンタルな、日本思想史上の事象であつたと言つてよいだろう。もちろんそれはたつた数十名の武士が、私怨に破滅した主君の恨みを晴らしたというこゝとだけであつたかもしれない。しかし、この出来事は多くの議論の呼び水となり、日本全体のあらゆる階層を巻き込んだ、〈セクスメイキング〉⁴のプロセスを形成し、たんなる事実以上の意味を持つに至つた。その要因は、実はこの事象それ自体に内在しているといつていいのではないかと、私は考えている。

たとえば、『堀部武庸筆記』とよばれる、この討ち入りに参加し、当然の帰結として死をたまわつたひとりによつて書かれた第一級資料としての記録である。すでに多くの叢書に収められ、もっともアクセスの容易な〈資料〉の一つと

言つてよいだろう。そこで、興味深いのは、あきらかに価値観も動機もまちまちにずれ、ときに真つ向から対立していたこの集団内での〈センスメイキング〉のプロセスが、きわめて興味深く詳細に見て取れることである。

堀部安兵衛・高田郡兵衛・奥田兵左衛門らは、同筆記によれば、上野介が「手も軽く」「存生之由」を知り、上野介宅へ切り込もうと、「家中面々」へ相談に走り回つた程であった。国もとでは自分たちと同様の志のものがあるとの伝聞はあったが、家老・用人らも取り合わず、上野介屋敷には上杉綱紀・吉憲親子が代わる代わる詰めていて実行も困難。大死にしたいはずもなく、このまま江戸にいても生き恥をさらすばかりなので、赤穂へのぼり、家中離散する前に、「このこと」を相談したいし、この一義を果たせない上は、城を枕に討ち死にするのも「本望の至」だ、という結論に達し、三人連れだつて赤穂へ、そして大石内蔵助に対面する。「武士」のメンタリティーそれ自体は、〈実感〉において、まったく私たちの理解を絶するものである。

しかし、興味が尽きないのは、この〈硬派〉の代表のような堀部武庸らも含めて、この赤穂遺臣たちのグループにおける意志決定が、ほとんど理想的といつてもいいかたちの〈センスメイキング〉のプロセスを経て、行われているように見えることである。ほとんど社会の総意のように、仇討ちへの期待が高まるなか、すくなくとも「この一義」にいたるプロセスは〈理想的〉である。充分に議論され、理解がすりあわされ、集団の意志がきつちりできあがっていること、それは、出来事の「強さ」としてあらわれるのではないか。

彼らの書き残したものは、この事件の現在にいたる不動の「人氣」によつて、じつに容易に手に入るし、多くの人の眼に触れる。わかりやすい「解説書」も枚挙に暇がない。そこで、いかに誣いようとも、否定しがたいのが、かれらの自発的意志と強制の結果ではない、意志の統一だったのではないだろうか。この三人、特に堀部は、「この一義」つまり仇討ちとお家再興という矛盾する二つの方向付けがあつたなかでは、とくに前者を主張していた。江戸に下向後も、

久しぶりに参会した安井彦右衛門にたいし、「何れも亡君を主君と仰候上は、いつ迄も亡君へ御奉公可仕儀と奉^{ぞんじたまつりせうろう}存^{ぞん}候。大学殿御家を立て主人之敵を見遁し可指置儀なし。亡君之仰に候はゞ、大学殿にも手向可申我々にて御座候。」と云え、ことばを極めて言い返していたのだから。

集団、というよりは組織における意志決定、または〈センスメイキング〉は、現代のたとえばビジネスにおける、無視できない重大な考え方の枠組みである。私たちが大学の組織運営において、そのことを閑却しては何事も語れないし、ましてや困難な状況を乗り切ることが出来ない。近年の遠田雄志氏の所論は、困難な現在に生きる私たちの誰もにとつて、切実な関心をよびおこす。いわゆる〈忠臣蔵〉とよばれるものの〈総体〉がもつ、日本思想史上におけるインパクトは、基本的にはその行為としての〈有効さ〉に由来し、その〈有効さ〉はその組織の成員によつて共有された、自動的に共有された〈意志決定〉と〈センスメイキング〉のプロセスにあるのではないだろうか。

さて、この無骨な堀部安兵衛武庸は、このような意味〈筋〉論ではあるが、過激な主張に似合わぬ柔軟性も持ち合わせていた。その柔軟性は自己の主張を殺したり、我慢・妥協するといった形で発現はしない。同筆記所載の二月三日付大高源五書翰に。

自然其内木挽町へ御手当も有之、御出候時少にても御手あて有之時は、先方への趣意^{しゆいとげ}遂られぬ筈との惣右方被申候様にて候得ば、此段難心得被^{こころえかたぞんぜられせうろうよし}存候由に候。縦い、か程に高禄に御取立候ても、先方之事、何卒木挽町の御面目にも成、人前も被^{よまじほのしなになさる}成能程之品に於無之は、^{これなきにおいて、とてまけがれ}逆穢たる御名跡を立置候はんよりは、^{たておきせうら}打つぶし申段本望と被^{ぞんぜられせうろうじよう}存候条……

吉良上野介に相応の処分がくだれば、たとえ軽いものでも、浅野内匠頭——ひいては跡目を継ぐこの場合浅野大学——の面目が立つ。その事がなければ、その名跡それ自体が「穢れた」ものとなって、意味を失う。これは、大石内蔵助が大高源五に示した考えとして記されている。大石↓大高↓堀部ら三名という経路でこの場合伝達されてはいるが、つねに一方的に「上意下達」されるものではなかった。「急進派」の堀部等に動かされ、山科に大石を問いただしに戻り、その場で大石の反論としてこれを得、大高は納得して堀部・高田・奥野らに書状で伝えたのである。

赤穂義士討ち入り事件は、先述のように日本思想史上の〈モニユメンタル〉な出来事であった。このような議論を戦わせつつ、〈センスメイキング〉→〈意志決定〉のプロセスを踏み、まさに道なき道を拓くように、意志が共有されていく。このような暴力的事件は、えてして「衝動的」におこる。元禄十四年三月十四日江戸城内で吉良に斬りかかった浅野長矩の所為がそうだったように。しかし、その所為の結果命を落とした主君の仇討ちとして企てられたそれは、あたかも詰め将棋のように、考え抜かれたものであった。成否のための「計画」ばかりではなく、この拳にどのような意味があり、自分たちがどのように納得して自ら進んでその拳に赴くのか。

〈モニユメンタル〉となり得たのは、偏にこのとことん議論され、考え抜かれたプロセスによってであり、その事によって、あくまで括弧つきではあるが〈完璧〉な出来事となり得たのである。

この一件が〈完璧〉なものとなり得たとして、その〈完璧〉さをもたらしたのは、これを実行した赤穂義士達のみの功ではない。この一件は、彼らがことを成し遂げたあと、さかんに巻き起こった議論・ルポルターージュも含む著述、さらには、芝居・浄瑠璃などが、〈伝説〉を構築していったからである。たとえば、「浅野内匠頭」「吉良上野介」「大石内蔵助」は、『新版 架空人物伝承辞典』（平凡社 二〇一二年刊 旧版は一九八六年）に、項目を立てられている。実在

の人物ではあるが、一般に植え付けられたイメージが、芝居・浄瑠璃によって作り上げられたものだからであろうか。

彼らは、徒党を組み¹⁰吉良邸に押し入って大勢と切り結び殺害または傷害した上、吉良上野介を殺害した。飛び道具などをを用いるなど、公儀を恐れない所行が不届きである、として処断された。これは、事実その通りであって、当時の法度に照らせば、異論の差し挟みようがないであろう。いいかえれば、初めからこうなると決まっていたようなものであり、「心情」を理解し、斬罪ではなく切腹を命じた「おもいやり」のある処分であったということになっている。それはあながち彼らに同情的な世論に憚って、というばかりでもないだろう。先述のようにこの挙は、詰め将棋のように考え抜かれ、さんざん議論とすりあわせ——すなわち〈センスメイキング〉——を経て、実行に移された。だからといって〈完璧〉なものなどこの世にあるか、とくにこういう乱暴な所為については。

周知のように、この挙についてはいくつも批判的な言説は有り、全否定的なものさえある。たとえば太宰春台の『赤穂四十六士論』である。これをどう評したのか、頭が痛いのだが、手短かに言うといまどきの「炎上」するブログなどに似たところがある。サッカーのフィールドは広いからボールはどこへでも自由に転がりそうに思われる。サッカー選手も人間で、足が二本あるものだから、広いフィールドのどこにたつても良さそうなものである。しかし、実のところそこにいなければならぬ「場所」があり、ボールがくるに「きまつてる」場所があり、どこに蹴つても良さそうなのに、その実そこ一線あるいは一点しか抜けない「球筋」というものがある。絶妙なポジショニングというものもあるし、「妙技」とよべるシチュートがあるのだ。

当事者は批判され放題のように見えて、その実「強み」もある。太宰春台のような人間は、なんともケチのつけようがあると思っただろうが、実はそうではないことがある。赤城を枕に討ち死にすべきだった、というのもそれは堀部武庸らを初めとする当事者達がわが身の上として真剣に検討したことからである。さっさと「討ち入り」してダ

メならダメで死ねばいい、というのも、犬死にする本人達の身になれば、たまったものではない。堀部武庸らも、いったんは犬死にを回避して、赤穂へ相談にのほつている。「何も考えてないんじゃないのか」などというのは簡単だが、脇から何とでも言える立場のものが、思いつくことは総じて浅はかである。どうせ棄てる命なら、可能な限り有効に棄てたい。とすれば、文字通り「命がけ」で考えるのだ。太宰春台の『四十六士論』には反論も多く、評判も悪かったのだろうか。『紫芝園後稿』の後印本では削除されているという。「炎上」して「削除」なんて、よく聞く話である。これは決して頭のよい自由な言論が頭の悪い朴念仁によってたかかって封じられた、というようなものではない。人をけなせば相対的に偉くなったような気がするのかもしれないが、現実問題としてはむしろ逆である。とくに時として「絶妙なポジョニング」が相手の場合には。泉下の彼らも「義士」なんていわれるほど俺たちは馬鹿じゃない、と思っているかもしれないではないか。

「ポジョニング」のよい者を批判する場合、こちらの「ポジョニング」が難しい。仇討ちをして誉められてあわよくば命が助かって、高禄を得て出世する気満々だったろうが、当てが外れて死んじまったね、ざまあ。といえる思い切りの良さは凄いが、その「ポジョニング」には死んでもたちたくない、個人的な好みでいわせてもらえば、私は。

学者は芝居・浄瑠璃作者に比べれば、気楽である。作者たちは、真剣勝負をしているからだ。ことの当否や理屈よりも「ポジョニング」を先に考える彼らは、時として唐変木の学者達よりは、「本質」を見ているといえるかもしれない。「学者でない」という意味では、「都の錦」として知られる六戸與一光風も「二千風」変名でこの赤穂義士事件について取材し書き残している。二〇一一年十一月大阪府枚方市で自筆の『播磨梶原』稿本が発見¹¹されて話題になった。流罪先の枕崎で書いたといわれるものである。彼もある意味この討ち入り事件にとりつかれた、といえる人物。先述の「流罪」

もこの事件を取材しようと江戸にくだり、不運な行き違いから「無宿人」となったことからである。¹² この『播磨梟原』と同様に、写本が盛んに世に行われた同じ作者のものに『内侍所』と題されるものがある。盛んに筆写され出回ったものらしく、比較的安価に購入できる。架蔵の『内侍所』は文政十二年江戸小石川にて信州在住池田清助が筆写した、と各巻末に記されている。『内侍所』とこの書を題した趣旨として、「万民の教へに成るべき事」をいう。大石に追いついて危急を知らせた商人。武器の調達をした天野屋が秘密を守ったこと。近松の下人で近江の百姓喜三郎が主人とともに死ぬことを願ったこと。原惣右衛門の母の自害。大石主税が父の命に従うのは幼年の者の手本。堀部弥兵衛の切腹は老人の戒め。吉良邸の改築を請け負い凶面を義士に渡した棟梁は匠人のいましめ。大石内蔵助の忌日を忘れず申う遊女のまこと。逆に義士たちの遺物を売り払って「不首尾」となった泉岳寺の酬山和尚は僧徒が顧みて恐るべき「鏡」である、等の事例を延々と列挙した後、

心を付て思ふべし。然れども此一書におゐて、士農工商、幼少男女、出家老人哥舞妓役者白拍子匠のおしへに残る事なし。誠に天下の鑑。古今曇らぬ至宝の内侍所の明鑑ならずや。

結論から言えば、この著作も都の錦もあまり信用できない人物である。第一序の京都の旅館にある「筑州隠士」が「原益軒」ではないかと誤解させる気満々である、と夙に指摘されている。萱野三平が、一時的狂気となって立てこもる友人にたいして、主命によって討ち手として赴き、「武士の情け」で切腹の体にして殺害する話などは、妙に具体的である反面、何に基づく記事なのか、まったくわからない。虚説紛々なので、読者の皆さんご自分で判断してくださいという第三の序文の文言には違和感を感じないではいられない。逆説的に信憑性を高めようとするトリックのようにも見

える。もちろん「虚説紛々」であったのは、この種の著作が最も初期になされ始めた瞬間から、まったくその通りで、原物右衛門も、近松勘六も、処断の前に書かされた「親類書」が残っているため、壮拳を励ますため母が自害、などという『赤穂義人録』などの記事は、事実とは認められないことがわかっている。それよりは、近松門左衛門の『碁盤太平記』¹³で大星由良之助の妻と母が大星父子の壮拳を促すためにともに自害する、虚構の物語が想起され、このような犠牲の物語は、正徳五1715年の『国性爺合戦』でも繰り返し用いられる、人形浄瑠璃・芝居においてはむしろ常套的なものである。赤穂義士のうちの何名かについて作られたこの種の話の水源はどこなのか、察するにあまりあるといえるだろう。

この事件に関与し、義士等を助けた人々は「万民の鑑」なのだろうか。都の錦々 宍戸光風は、この著作の命名に、武士だけの快拳ではなく、「日本の」快拳のだと主張し、万民にこの「栄光」を分配しようと企てているかのようである。これは武士だけのお祭りではない、庶民たちまでが、勝手に、一方的に応援し快哉を叫ぶことによって、この「祭」を共有したがつている。「万民の鑑」という読み替えは、「忠臣蔵」的観念の集合体を確立し、いわば「日本の快拳」として、人々を芝居小屋へかりだし、この種の著作や浮世草子への関心をかき立てる、マーケティングの一環としても機能した。

赤穂・浅野の遺臣たちの間で、この事態をどう理解すべきか、その理解にしたがつてどう対処すべきか、綿密に練りあげて、この事件は成立し、「快拳」は達成された。その破綻のなさ仕上りの良さ、妙ないい方だがそのような意味での「完璧さ」が、同じ武士達ばかりでなく、庶民たち全体が〈欲しがる〉ところとなったのである。この「マーケティング」では「批判者」たちも協力者として数えられる。自然発生的で、おそらく不断の議論とセンスメイキングによって、「完璧」な仕上がりを示す、事実そのものがこのような効果を生んだ。この事件は二十世紀を迎えてなおいまだに

その「真実」に人々の関心をよびつづけている。とてもじゃないが、よくわからない出来事なのだが、よくわからないのは当時の庶民達も同じである。この事件を介して、庶民は「武士」を理解し、彼らを支える「万民の鑑」として、やっぱりよくわからないながら、社会としての一体感を、再生産し続ける機構を手に入れたかの如くなのである。

さて、冒頭にあげた、吉田松陰の話に戻ろう。この旅を記した『東北遊日記』は、この躰きのあと松陰が辿った多難な生涯を思えば、不思議なほどに陽気な著作である。実際にその通りの「雄大な自然」の中の旅は、読んだだけでも胸がスカッと開けてくるような、心象を描く「詩」に埋め尽くされた前半部分がまず注目される。経済と要害と教育制度、統治の仕組みは一貫して松陰の関心にあるのだが、この前半部分の陽気さは、たびたび記される詩によく表れている。

縦為一時負 報國尚堪為¹⁴

(例え一時的に国にそむいても、私はわがふるさと萩の恩にむくいるためにこの拳を思いとどまることは出来ないのだ)

「不忠不孝」とも同詩の中にある。亡命の罪について、何度も言及し、わかっていないわけではないのだが、いかんせん、何から何まで陽気なのだ。出発は嘉永四年十二月十五日。旅中に正月を迎えたのは、安藝五蔵(那珂彌八)の姻族の家。所伊賀右衛門。弘化元年水戸斉昭が幕府に隠居謹慎を命ぜられた際、仲間と江戸に赴いて、紀州侯に斉昭公の無実を訴えたという「忠臣」である。「草莽の豪英」と彼を賞賛する詩を贈る。八日には利根川河口から海を望む。「歐羅・亜墨」に思いを致し、「むなくそわるい」想いをする。樽酒を開いて「浩歌」する。こういう詩は初めのうち多く、

しだいに詩を吟じて酒を飲む、そういうあり方を批判するような内容を詩に作り始め、徐々に減っていくようである。二十日には、鈴木石見守・太田丹波守が相次いで罷免されたとの報を聞き、「奸黨の巨魁」が斃れたことを喜ぶ。「四海皆兄弟 天涯如比隣」と詠じはじめ「誓將功名遠相聞」と終わる、気概にあふれた詩を作る。

この高揚する気分的高峰は、二月五日、會津を辞して北越に向かうあたりであろうか。雪が深いから、と止められるが、敢行する。雪道は苦しいが、その詩は最も高い調子で歌い上げられる。艱難しつつも雪山を見廻しては高笑する。「所志在国器」——国の政治を任せられるような人物——を目指す。青年の志を空しくせず、男子の本分を發揮し功名を立てるため、その時が来たら努力をしなければならない。

お祭りの花火のように景気のいい詩がつぎつぎ「打ち上げ」られるうちに、先述のように酒を飲み詩を詠じる自らを恥じるような詩を作り始めるのだが、そこから先は、私はあまり好きではない。なにかしぼんでいくようで悲しくなる。たとえば、佐渡島に渡航することに執着し、出雲崎で日を送る。なぜ、佐渡島への渡航に執るかといえば、蝦夷行きを、ひいてはこの旅の成功を卜したいからであるという。そう、この旅は松陰が厳しい現実直面し、挫折し、しかし、教育者として不動のモニュメントを建てて、若くして刑死するその時を前にした、幸福な時間。ここで彼は「艱難を求め」と再三謳う。そして、確かに艱難は本当にやってきたのだ。

那珂彌八の仇討ち成功をうらやむ松陰は、この『東北遊日記』の「亡命」を取えてした。国禁を犯して、出奔したのである。そうすればどうなるかわかっていてそうしたのだ。いわばそれは赤穂義士討ち入り事件の「本歌取り」だっただろうか。その本歌取りがこんな痛ましい結果をもたらしたとすれば、〈忠臣蔵〉を生きようとした、その結果がそれだったとすれば、〈忠臣蔵〉は勘違い野郎の松陰に不利益をもたらした、といていいのだろうか。

結論を言わせてもらえば、それは、違う。その根拠を説明するのはちょっと難しい。一つはこの旅行記に記される吉

田松陰があまりにも幸せそうで、耀くビジョンを持っていたからである。もう一つは遠田雄志氏の先掲書に引用されていた〈カリブーの肩胛骨〉の事例が説明してくれるかもしれない。私たちは先が見えないとき、充分な情報が得られず、普通に考えれば判断できないことがある。しかし、ナスカビインディアンはカリブーの肩胛骨を火であぶり入ったヒビを読んで、どの方向に行くのが最も多くの獲物が得られるのかを占う。この方法の利点はとにかく〈決定〉出来ることだ。ためらわず決然と突き進むことが出来る。だいたいはじめから獲物が手に入るかどうかはわからないし、手に入らなかったところでダメモトであるといえる。決断が出来ないよりは、間違った決断をした方がいいことが、現実にはたぐさんあるのだ。

〈忠臣蔵〉は「本歌取り」に適している。それは自由な意志で集团的〈センスメイキング〉に命がけで集中的に取り組んだ成果なのだ。それは、人を解き放つてくれる。吉田松陰は文字通り〈忠臣蔵〉をトリガーとして、壮大な夢を描いた。意気軒昂、幸福な時間を持った。例えそれが挫折したとしても、おそらく内面化したそれは、日本で最も成功した教育者となった〈吉田松陰〉を創ったのである。

注記

1 『東北遊日記』による。『吉田松陰全集』第九卷、一六七頁。

2 この「遊学」については、去る七月十六日に吉田大次郎（松陰）名で願い出られており、七月二十三日には「旅行許可指令」が願いのままにおりている。『吉田松陰全集』第十卷四三頁による。「出立日限等の儀は其の節に至り申出づべく候間……」とあるので、「数日前」に出立期日十二月十四日が、「急」すぎて、許可が下りるのも、通行手形も間に合わなかったのであろう。陸奥藩士ですでに脱藩している友人江幡五郎の仇討ち援助の関係もあってよんどころなく出奔に至ったという。藩邸を一時的外出許可証（稽古切手）で出たまま戻らなかった。

- 3 「亡命の罪」で養子として入った吉田家は取りつぶされ、彼自身も土籍をけずられ、実父杉百合之助の「はごくみ」の身の上となった。
- 4 彼らの君主浅野内匠長矩による殿中の刃傷が出来たこと、即日田村右京太夫建頭邸で処刑（切腹だが）されたこと、この異常な事態をどう理解するか。家臣達の間で、「遺恨がある」ということで斬りかかったなら、これは「喧嘩」だ、それなら「喧嘩両成敗」という掟がある。したがって、これは「片手落ち」の処分だ。etc. ……といった、極めて積極的な（センスメイキング）のプロセスがあったことは、あきらかだろう。カール・E・ワイク著『センスメイキング・イン・オーガニゼーション』（1995 日本語訳二〇〇一年 文真堂）
- 5 この書は、かなり早い時期から流布しており、『介石記』筆者も見ているといわれている。ここでは「日本思想体系27近世武家思想」によった。
- 6 彦右衛門は、舎弟浅野大学殿の「首尾」がよい感触があり、まだどうなるかわからない。もし「御祖父の御家を御起し被成候事」がなるなら、上野介の首を御覧になるより、亡君はお慶びになるだろう、という異見である。
- 7 『組織を変える（常識）』（中公新書1789 二〇〇五年刊）。氏は「組織論で読み解く 江戸時代(1)」（10）（二〇一〇年一月〜二〇一三年四月）を題材に同誌に一九九三年四月から十月にかけて「新釈・忠臣蔵」（序）（破）（急）の考察がある。
- 8 浅野内匠頭舎弟、浅野大学のこと。
- 9 足軽頭、原物右衛門
- 10 元禄十六年二月四日付、「申渡之覚」によればそういうことになる。
- 11 山本卓氏「『武家不断枕』と『播磨相原』―都の錦の赤穂義士伝実録小考―」（『国文学』二〇一三年三月、関西大学国文学会）。
- 12 野間光辰著『近世作家伝攷』所収。「都の錦獄中獄外」などによる。
- 13 宝永7(1710)年大坂竹本座初演の人形浄瑠璃。赤穂義士討ち入り事件を題材にしたもので、『兼好法師物見事』と二対の作で、後半部分。二作に分けたのは時事を題材にすることの禁を憚ったものだといわれている。
- 14 『吉田松陰全集第九卷』『東北遊日記』一六六頁。